

19 世紀ロシア文化研究会の 4 年間

19 世紀ロシア文化研究会の第 1 回報告会（2000 年の夏）から 4 年。この機会に、長いようで短くもあった 4 年間の活動をふり返ってみた。

19 世紀ロシア文化研究会は東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室の大学院生によって運営されている研究会である。初代責任者は鳥山祐介さん、2 代目、乗松亨平さん、3 代目、尾松亮さん、そして今秋、4 代目の安達大輔さんに運営の仕事が引き継がれた。4 年の間に責任者や参加者が入れかわり立ちかわり留学等で日本を離れ、私自身、海外に長期滞在していた時期もあった。それでもインターネットで世界が結ばれている今日のことであるから、研究会についての情報を皆で同時に共有することができ、それが時には多少の励ましと気晴らしを与えてくれたのではないかとも思う。

研究会では報告者だけでなく、聴衆もまた主役であった。大きな学会では実現しにくいような、報告者、聴衆間の熱くて長い議論が会の特徴だった。議論はしばしば数時間に及び、知的精神的というよりは肉体的な限界がやってきて、さすがに切り上げたいと思うようにもなる。とはいえこの研究会の魅力は「有益な」情報交換だけでなく、「熱心な」議論にもあったようで、誰ひとりこのこうした性格を変えようとした者はいなかった。

運営は別として、研究会自体は広く学外にひらかれており、現在は多様な研究分野と所属の方が参加されている。活動の詳細についてはホームページに掲載されているので、ぜひご覧いただきたい。（金沢美知子 記）

19 世紀といえば、一般に日本のロシア文化研究の中では王道中の王道である。しかし、特に文学研究に言えることだが、この時代へのアプローチは得てして特定の作品や作家、あるいはロシアという国そのものに対するロマン的・排他的な愛情に結びついていることが多く、その一種独特な押し付けがましさは、しばしばこの分野へのアクセスを試みる者の意欲を萎えさせている。

今から四年前に研究会を立ち上げた時にまず意図したのは、こうした「伝統」に違和感を覚える者の立場から、できるだけ等身大に近い「19 世紀ロシア」像を築き上げることだった。とはいえ、いきなり何か大それたことを想定していたわけではない。会の主な活動内容として考えていたのは、欧米ならびにロシアにおけるこの分野に関する最近の研究の中から、この「伝統」からできるだけ外れたものを選んで要約紹介し、それに関連して情報交換を行うという、ごく慎ましやかな作業であった。

「ポスト・コロニアリズム」「大衆文化」「ジェンダー」といった「流行り」の切り口による 19 世紀ロシア文学研究が、最初のころの研究会で俎上に載せられていた。確かに、本来「普遍性」を追

及する学問において、流行にこだわることは適当でないかもしれない。しかし一方で忘れてならないのは、研究者も自分の置かれた社会的・学問的コンテクストから自由ではないということである。「20世紀という時代を知るにはまず19世紀に関する知識が、19世紀を知るには18世紀に関する知識が不可欠であり…」といったことは比較的好く言われるが、その逆もまた真であり、従来の「19世紀ロシア」観を形成してきた19-20世紀という時代への理解、及びこの時代を通じ強固に内面化されてきたある種の価値観を客体化する「現代的」な眼差し、こうしたものが19世紀ロシア文化を理解するにあたってはまず不可欠なのである。『プーシキン言語辞典』のような文献にしても、それが20世紀の視点から編まれていることを意識せざるを得ない局面があるかも知れない。

ところで、会がここまで長く存続したことも、これほど大規模になったことも、私にとっては全く予想外であった。当初念頭に置いていたのは、せいぜい3、4人のメンバーが代わる代わる訪れるような、こじんまりした会だったのである。会の性格にいろいろと変化はあっても、設立の際の意気込みはどこかで保ってもらいたい、というのがささやかな希望である。(鳥山祐介 記)

初代責任者の鳥山祐介氏の留学にともない、2001年の秋以降、私が任を引き継ぎ、約2年間務めさせていただいた。その間、開催のペースはやや落ちたものの、早大等の他大学、また歴史研究やフランス文学といった、所属・専門を異とする発表者も交え、変わらぬ盛会を維持できたのではないと思う。発表後の議論が数時間に及ぶこともあった。

レビュー対象の特徴としては、「最近の研究動向」の紹介という当初の目的からやや離れ、ヴィノグラードフ、ロトマンといった往年の大家が比較的多くとりあげられた。1年目に、ポストコロニアリズム、フェミニズム、大衆文学、メディア論など、現在の19世紀文学研究の主要潮流がひととおり出揃ったということも、関係していたかもしれない。一方でオリジナルの発表が増え、それをおして「最新動向」にも触れることができた。

レビュー、オリジナル発表に共通していえることとしては、いわば「公益」を目的とする会の性質もあって、ひとつの対象を細かく掘り下げる体のものよりは、大きな時代傾向や現象・流派を巨視的に捉えようとするものが多かったようだ。そこで与えられた視点はそれぞれ示唆的であったが、各人の研究においては、それを個別対象の側から再検討する作業がかならず必要だろう。歴史学や社会学との学際化が進む昨今の19世紀文学研究において、さまざまな作家やテキストが、奇妙になだらかな配列へと回収されてしまうことは珍しくない。「社会的コンテクスト」の氾濫(あるいはそれを現出させる方法論の氾濫)は危うさも大いに孕んでおり、テキストとコンテクストのあいだの生産的な往復運動(両者がおたがいを確認しあうようなものではなく)が、重要な課題なのではないかという思いを強くしている。(乗松亨平 記)

この一年間の流れをみて特徴的なのは、報告の内容にレビューよりも報告者自身の研究発表(またはその中間報告)が多くなったことである。

第三期の初回（第23回）が五島氏による修士論文の中間報告によって幕をひらいたことも象徴的かと思われる。その後第26回飯田氏の「プーシキンとレノーレ譚」や第29回に私自らおこなった「ドストエフスキー作品における子どもの社会化」はまとまった研究成果の発表というよりも、研究中のテーマを議論にかけるといった形をとっている。

もうひとつの特徴は東京大学以外の大学・研究機関からの積極的な参加である。特に第24回には千葉大学の大山氏から、第28回には北海道大学スラブ研究センターの越野氏から貴重な報告をいただくことができた。

他方で創設時鳥山氏の目的の一つであった資料情報交換や図書紹介の要素が薄れつつあることは一つ危惧するところである。報告の後の懇親会では確かにそのような情報交換は行われているが、やはり考えるべき問題ではある。

なにはともあれ研究実績のない私が一年間責任者をつとめることができたことは、積極的な参加者達のおかげにほかならない。これからも東京大学、他大学をとわず積極的な参加を歓迎したい。

（尾松亮 記）

19世紀ロシア文化研究会 <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/19vek.html>

2004年11月